

小 論 文

法文学部（法経社会学科 地域社会コース・経済コース）

注 意 事 項

1. 「解答始め」の合図があるまでこの冊子は開かないこと。
2. この冊子は7ページである。
3. 「解答始め」の合図があったら、まず、検査室に掲示又は板書してある問題冊子ページ数・解答用紙枚数・下書き用紙枚数が、自分に配付された数と合っているか確認し、もし数が合わない場合は手を高く挙げ申し出ること。次に、受験番号・氏名を必ずすべての解答用紙の指定された箇所に記入してから、解答を始めること。
4. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に横書きで記入すること。

2 ページ以下の課題文を読んで、次の設問に答えなさい。

問 1 課題文を要約しなさい。

(400 字以上 600 字以内)

問 2 課題文の議論にあるような、公平性を重視した社会の仕組みを一つ取り上げ、それがどのように機能しているのかを述べなさい。

(400 字以上 600 字以内)

私たちは、もちろん人によって程度の違いこそあれ、平等な社会のほうが不平等な社会より望ましいと考えます。その点は、経済学でもまったく同じであり、経済学は公平性という評価軸を持っています。それでは、どうして私たちは、格差を望ましくないものとして受け止めるのでしょうか。

[中略]

私たちは、所得が不安定である状態より、安定であるほうを望みます。例えば、月給が2分の1の確率で90万円、残りの2分の1の確率で10万円になるケースと、必ず50万円受け取れるケースとを比較してみましょう。

月給の期待値（平均的に受け取れる値）はいずれも50万円ですが、大半の人々は、所得が確定している後者のほうが望ましいと考えるはずで、これは、私たちが、所得が変動するリスクをできるだけ回避したいと考えるからです。90万円もらえると確かにうれしいけれど、10万円だと生活に困ります。そうした不確実な状況を避けるためには、どう転んでも50万円を確実にもらうほうがありがたいわけです。こうした人々の考え方の特徴をリスク回避的と呼びます。

もちろん、90万円を手にする魅力も捨てがたく、波風の起こらない安定した人生より、一か八かの人生を選択する人もなかにはいるはずで、しかし、ここではそうした人はいても少数派であり、社会を構成する人々の大半はリスク回避的であると想定します。この想定はそれほどおかしいとは思えません。

社会全体の所得格差を忌避する気持ちも、人々がこのようにリスク回避的であることで説明できます。いま、皆さんが大学なり高校なりを卒業し、新社会人として社会に出るところだと想定してみてください。そして、自分がこれからどのような人生を送り、どれだけの所得が得られるかまったくわからないと想定しましょう。こうした状況を「無知のヴェール」に覆われていると表現することがあります。ここから話を始めましょう。

さて、そうした無知のヴェールに覆われている状況に置かれた皆さんが、世の中の大人たちの状況を見渡したとき、人々が稼ぐ所得に差はまったくなく、すべての人が

50万円の月給を得ているとしましょう。そうした世の中を、社会Aと名付けます。一方、社会Bに住んでいる場合は、社会を構成する人のうち2分の1が90万円稼ぎ、残りの2分の1が10万円にとどまっていると仮定します。いずれも極端な例ですが、社会Aでは所得格差がなく、社会Bでは所得格差が存在していると想定するわけです。

当然ながら、社会Aに住んでいると確実に50万円を稼げると期待できます。一方、社会Bに住んでいる場合は、それこそ無知のヴェールに覆われ、将来どうなるかまったくわかりません。社会の状況から判断して、自分の稼ぐ月給は2分の1で90万円、残りの2分の1で10万円になると予想するしかありません。

社会Aと社会Bのどちらが望ましいでしょうか。自分が得る所得の不確実性を考えると、あなたがリスク回避的である限り、所得格差がないAのほうが望ましいと考えるはずですよ。だからこそ、あなたは所得格差を望ましくないと考えるんですよ——と経済学は説明するわけです。

ここで、経済学は巧妙に(?)議論のすり替えを行っていることに読者の皆さんは気づいてください。所得格差をどう考えるかという問題は、それこそ世の中の有り様に関する論点です。ところが、リスク回避は、あくまでも個人の所得変動リスクに関する問題です。次元が違うはずですよ。しかし、経済学は、所得格差を望ましくないと、世の中の有り様に関する格差回避という概念を、リスク回避というあくまでも個人レベルの問題に“翻訳”して説明しているのです。

このように問題をわざわざ翻訳するのは、経済学が個人を議論の出発点に置く構造になっているからです。そこでは、所得格差の問題は、あくまでも自分自身の問題として読み替えられています。世の中の所得格差はできるだけ避けたいという格差回避の度合いを、自分自身の所得の変動に関するリスク回避の度合いと解釈するわけです。

皆さんが、この方法でも悪くないなと思ったとすると、世の中の人は所得格差をどれくらい回避しているのか、つまり、人々の格差回避度が気になりませんか。本題から少し外れるのですが、ちょっと考えてみましょう。

実は、リスク回避の度合いについては、それを調べる方法がすでに確立しています。株式や債券など金融商品への投資を考えてみてください。ハイリスク・ハイリターンという言葉聞いたことがあると思いますが、人々は、リスクとリターン(収益)を

両にらみにしながら、最適な投資戦略を練っています。その投資戦略の中身を事後的に調べることで、その人のリスク回避の度合いを推察することができます。貯蓄のほとんどを銀行に預けている人はリスク回避度が高いでしょうし、逆に、株式や外債にお金をつぎ込んでいる人はリスク回避度が低いはずで

それと同様に、人々が世の中の所得格差の状況をどのように受け止めているかを調べてみます。人々の幸福の度合いを示す尺度があったと仮定して、その水準に注目します。メンタルヘルスを示す指標があれば、それに注目してもよいでしょう。所得格差が大きいとそうした指標は悪化するはずで

その悪化の度合いから人々の格差回避度の度合いを推察できそうです。筆者は、こうした発想で、統計を用いて人々の格差回避度を具体的に調べたことがあります。その結果、平均的に見ると、人々の格差回避度は、金融商品の投資戦略の場合に問題になるような、リスク回避の度合いと同じようなレベルの値であることがわかりました。

さらに、格差回避度が、人々が置かれた状況によって左右される可能性もあります。さきほどの説明では、人々は無知のヴェールに覆われている、つまり、自分が将来どうなるかはまったくわからない状態に置かれていると想定しました。しかし、この想定は現実的ではありません。理論を展開するために生み出された仮想的な概念です。実際には、世帯所得や就業形態、学歴等の面で人々を取り巻く状況は大きく異なり、将来の見通しも違って来るでしょう。その人の属性によって、格差回避度はリスク回避度と同様に違って来るはずで

私たちは、無知のヴェールを羽織っているどころか、「^{てあか}手垢にまみれたコート」を着ているようなものです。

直感的に考えても、所得が低く、仕事も非正規であれば、そうでない場合に比べて、所得の変化に敏感になりそうです。高い収入が安定的に得られるのであれば、世の中の所得格差はまさしく他人事になりますが、逆の場合は身近な問題として受け止めてしまいます。また、自分の所得が今は低くても、これからどんどん増加していくことが十分期待されると、リスク回避や格差回避の度合いも弱まっていくはずで

このように、世の中の所得格差についてどのように考えるか——より一般的に言えば、公平性をどこまで強く意識するか——は、その人が置かれた社会経済的な状況に大きく左右されることとなります。

実は、所得格差はバブル経済のころのほうが近年より拡大する動きを見せていまし

た。しかし、格差拡大を問題視する風潮は、むしろ近年のほうが強くなっています。経済成長が鈍化し、貧困に直面するリスクがそれだけ身近な問題になっているからでしょう。公平性が人々の価値判断に左右され、理論的に扱いにくいのは、こうした事情もあるからだと思います。

格差回避をリスク回避と読み替え、世の中の有り様の問題である所得格差を個人の所得変動リスクの問題と解釈する。これが、公平性に対する経済学の伝統的なアプローチである——というのが、これまでの説明でした。読者の皆さんは、それをどのように受け止めたでしょうか。「一応、理解はできる。でも、私自身は、世の中の格差の問題を自分の所得の変動リスクの問題として受け止めているかなあ」と、疑問に思ったのではないのでしょうか。

社会の問題を個人の問題として受け止めるというのは、たしかに理屈としてはわかりますが、社会の問題はあくまでも社会の問題として受け止めるというのが普通の人間の考え方ではないのでしょうか。そうした直感は、実は的を射たものなのです。ここで、次のような実験を考えてみてください。

いま、30人程度で構成される小学校のクラスがあったとします（人数に大きな意味はありません）。先生が「お楽しみ会」で、次のような2種類のゲームをしようと生徒たちに提案しました。

1番目のゲームは、クラスにいる生徒たち各人にサイコロを振ってもらい、偶数が出たら「当たり」でキャンディーをあげますが、奇数が出たら「はずれ」でキャンディーはなし、です。もちろん、キャンディーをもらえる生徒ともらえない生徒が出てきます。

2番目のゲームは、だれか代表を1人適当に選び、その代表にサイコロを振ってもらい、偶数が出たらクラス全員がキャンディーをもらえ、奇数が出たら全員がキャンディーをもらえません（代表の選び方が問題になりそうですが、ここではとりあえずくじか何かで無作為に代表を選ぶとしましょう）。

「どちらのゲームをやりたいと思う？」と先生が尋ねたところ、過半数の生徒が2番目のゲームを選んだ、という実験結果を報告した論文があります。この結果は、なかなか面白いことを教えてくれます。

というのも、どちらのゲームでも、それぞれの生徒から見て、キャンディーをもらえる確率は2分の1で同じです。つまり、すべての生徒が、キャンディーという“所得”面では同じリスクに直面しています。その一方で、大きな違いがあることに注意してください。つまり、1番目のゲームでは、キャンディーをもらえる生徒ともらえない生徒がほぼ半分ずつ発生します。つまり、所得格差が生まれています。これに対して、2番目のゲームでは、キャンディーを全員もらえるか、全員もらえないかですので、所得格差は発生しません。この違いをどう考えるかです。

所得のリスクはどちらのゲームでも同じなのに、格差の状況は大きく異なります。そして、過半数の生徒が2番目のゲームを選んだという実験結果は、生徒たちは自分の所得変動リスクだけでなく、クラスメートの中で格差が生まれることも嫌っているということを意味します。つまり、多くの生徒たちは自分自身のことだけではなく、社会の有り様そのものに対しても思いを巡らせ、格差はよくないことだと感じているわけです。この実験の最大の工夫は、格差回避とリスク回避とを区別しているところにあります。よく似たタイプの実験はほかにもいくつか試みられ、学術論文として発表されています。

ただし、すべての生徒が2番目のゲームを選んだわけではない点には注意が必要です。筆者がこの話のある場所でしたところ、「私は2番目ではなく、1番目のゲームを選びますよ。自分の運命を他人に任せるのは嫌だからです」と答えた人がいました。なるほど、そういう人もいるでしょう。特に、代表者が誰になったか、どのようにして選んだかが問題になるかもしれません。これは、政治学のテーマにもなりそうです。

しかし、ここでは、少なくない生徒が2番目のゲームを選んだことが注目点となります。社会全体の有り様を個人の問題として処理する、個人の幸せを出発点にして世の中の有り様を考える、経済学の限界がここに顔を出している、と私はどうしても考えてしまいます。

私たちは、自分たちの所得の変動リスクうんぬん云々といった問題を離れて、世の中の格差の存在そのものを嫌う気持ちを持っているということになります。こちらのほうが、実感に近いように思います。実際、格差や不平等の存在が私たちの気持ちにどのように影響するかという点については、神経科学の分野ですでに解明がかなり進んでおり、

いくつかの興味深い研究成果が『ネイチャー』など一流の国際学術雑誌で紹介されています。

しかし、専門の研究成果を紹介するまでもなく、公平性を追求する、もっと平たく言えば、困っている人を助けたい、という気持ちが私たちの心にあるという点については、読者の皆さんの誰もが同意するのではないのでしょうか。国内で起こった大震災で被害に遭った人たちに、そして、海外でも例えばロシアに侵攻されたウクライナの人たちに対して、義援金を送った人は少なくないと思います。

通勤電車の中で体調が悪くなった人が出てきたときに、実際に助けるかどうかは、「助けたら会社に遅れるかもしれない」という個人にとって差し迫った状況が大きく左右するでしょう。それでも、誰もが「大丈夫だろうか」と心配するはずです。こうした人間の心情は、リスク回避という、経済学がわざわざ持ち出してくる概念では、うまく説明できない性格のものでしょう。

公平性の追求は、私たちの存在そのものに関わるものかもしれません。私たちは、自分が不公平な扱いを受けることに強く反発します。親からもらうおやつが、ほかのきょうだいより少ないとき、私たちは親を問い詰めます。学校の先生が同級生に明らかに^{えこひいき}依怙^{えこひいき}偏見をしたとき、私たちは先生を軽蔑するでしょう。自分が不公平な扱いをされることは、自分の存在や将来に関わることであり、許されません。

このように考えると、効率性に比べて公平性という観点、そして格差を忌避するという姿勢は、もっと人間的で、私たち人間の本質そのものに関わるようなところがありそうです。そして、そうした観点から格差を問題視する度合いは、貧困や不公平、差別といったリスクに^{さら}晒されている人たちほど、そして、そうしたリスクが社会全体で強まっているほど、高まるものと考えられます。

【出典】 小塩隆士『経済学の思考軸——効率か公平かのジレンマ』筑摩書房、2024年による。ただし、問題作成のため、原文の一部を改変している。

